

観光フォーラム

二つの道の巡礼者 (Dual Pilgrim) になるまで

—サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路 巡礼レポート—

How to become a Dual Pilgrim –A pilgrimage report from the Camino de Santiago–

長野 慎一

Shinichi Nagano

和歌山県庁

I. はじめに

2018 年 4 月現在、ユネスコ世界遺産に登録されている「道」の世界遺産と呼ばれるものは、僅かに二つを数えるのみである。一つは和歌山県の熊野三山を目的地とした「熊野古道」である¹⁾。もう一つは、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラにあるサンティアゴ大聖堂を目的地とした「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」である²⁾。これらの「道」の世界遺産を有するサンティアゴ・デ・コンポステーラ市と、和歌山県田辺市とは姉妹道提携を行い、両方の巡礼達成者を「二つの道の巡礼者 (DUAL PILGRIM)」として認定する事業を行っている。

筆者は 2017 年から 2018 年にかけて、これらの道の巡礼を行い、「二つの道の巡礼者」として認定された。本稿では、二つの道の概要と共通巡礼を達成するための条件について説明し、筆者のサンティアゴ巡礼についてのレポートを行う。

II. サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路

サンティアゴ・デ・コンポステーラはスペインの北西端部に位置し、エルサレム、ローマと並ぶキリスト教の三大聖地の一つに数えられる。サンティアゴとは、スペイン語でキリストの最初の弟子である聖ヤコブを意味する。紀元 44 年、エルサレムにおいて、多難な布教人生をユダヤの王による斬首という形で終えた聖ヤコブの遺骸は埋葬されることすら許されず、彼の弟子たちによって密かにスペインに運ばれたと言われる。

9 世紀に入り、聖ヤコブの遺骨と墓が発見された場所こそがサンティアゴ・デ・コンポステーラであり、サンティアゴ大聖堂はその遺骨を祀るために建築された。そして、このサンティアゴ大聖堂を目指す巡礼路が、サンティアゴ巡礼路である。聖ヤコブの骨を発見した羊飼いは星に導かれたと言われており、サンティアゴ巡礼路は「星の巡礼路」とも呼ばれる。歴史上、繰り返し戦禍を被ってきたエルサレムやローマよりも、比較的巡礼が行いやすかったということも一因として、サンティアゴ巡礼は盛んとなった。また、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの

ルートは一つだけではなく、スペイン国内の各地、またヨーロッパ各国から、複数の巡礼路が整備されている。

近年、サンティアゴ巡礼は一種のブームのような状態になっており、1993 年にユネスコ世界遺産に登録された以降も、巡礼者数は増加の一途を辿っており、2017 年にはついに 30 万人を突破している。サンティアゴへの巡礼の記録は 951 年のものが最古であるとされているが、1000 年以上が経った現在でも、巡礼のシンボルであるホタテ貝をバックパックに括り付けた多くの巡礼者がサンティアゴ大聖堂を目指し巡礼を行っている。ガリシア州政府も観光資源として積極的なプロモーションを行っているが、一方でオーバーツーリズムの問題も懸念される。

III. 熊野古道

熊野古道は、本州最南端に位置し太平洋を臨む日本最大の半島である紀伊半島に広がっている。豊富な降水によって育まれた雄大な自然は古来より自然信仰を生み、人びとは熊野の森、樹木、岩や滝などを神格化し崇拝した。熊野那智大社の「那智大滝」、熊野速玉大社の「ゴトビキ岩」などが、そのような自然崇拝の典型的な例であると言える。6 世紀に入り、中国から仏教がもたらされた後には、修験道の山岳修行の場としての役割も備えるようになり、9 世紀には空海が唐よりもたらした真言密教もその修行の地を紀伊半島に求めた。自然信仰、仏教、修験道という多様な信仰は、紀伊半島の各地で発展し、それらの聖地である吉野・大峯、高野山、熊野三山を結ぶ巡礼道として発達してきたのが熊野古道である。上皇から庶民まで、身分を問わず数多の人々による熊野の地への巡礼は隆盛を極め、その様子は「蟻の熊野詣」と形容された。

2001 年 4 月、紀伊半島に点在する吉野・大峯、高野山、熊野三山の 3 つの霊場と、それらを結ぶ参詣道は、「紀伊山地の霊場と参詣道」として、その文化的景観」という表題で世界遺産暫定リストに記載され、2004 年 7 月、中国蘇州で開催された第 28 回世界遺産委員会において、「紀伊山地の霊場と参

詣道」として世界遺産に登録された。日本においてその文化的景観が評価された世界遺産は、「紀伊山地の霊場と参詣道」が初めての例であった。

IV. 共通巡礼

1998年、二つの道は姉妹道提携によって結ばれ、2014年からは観光プロモーションを目的とした「共通巡礼」の取り組みが、サンティアゴ・デ・コンポステーラ市と和歌山県田辺市によって行われている。達成者は、二つの道の巡礼者の証明書と、記念品としてピンバッジを授与される。共通巡礼の達成者は年々順調に増えており、2018年2月21日には1,000人に到達した。

「二つの道の巡礼者 (DUAL PILGRIM)」に認定されるためには、それぞれ下記のいずれか一つを達成することが条件とされている。

サンティアゴ巡礼路

- ・徒歩または馬で少なくとも最後の100km以上を巡礼
- ・自転車ですでに最後の200km以上を巡礼

熊野古道

- ・徒歩で滝尻王子から本宮大社まで(38km)を巡礼
- ・徒歩で熊野那智大社～熊野本宮大社間(30km)を巡礼
- ・徒歩で高野山から熊野本宮大社まで(70km)を巡礼
- ・徒歩で発心門王子から熊野本宮大社(7km)を巡礼するとともに、熊野本宮大社と熊野那智大社に参詣

サンティアゴ巡礼路では、巡礼手帳にアルベルゲやバル、教会、観光案内所等におかれているスタンプを押して歩き、熊野古道では古道上に設置されているスタンプを集めて歩く。両方の条件を満たし、巡礼手帳を持参すれば、両市から共通巡礼の認定を受けられる。証明書の受付は、サンティアゴ・デ・コンポステーラ市においては、Turismo de Santiago Information Centerで、和歌山県田辺市においては、世界遺産熊野本宮館及び田辺市観光センターの2か所で行われている。



図1 サンティアゴ巡礼路 巡礼手帳



図2 サンティアゴ巡礼路 巡礼証明書



図3 熊野古道 スタンプ



図4 二つの道の巡礼者 証明書

V. 筆者の巡礼

筆者は和歌山県西牟婁郡上富田町に生まれ育った。口熊野とも呼ばれる上富田町は人口約15,000人の小さな町であるが、熊野古道沿いに設けられた神社である熊野九十九王子のうち、特に格式が高いとされる五躰王子の一つである稲葉根王子を有する。幼少期より熊野古道は常に筆者の身近にあり、現在も休暇を利用して繰り返し訪れている。2017年4月からの1年間、筆者は職場から派遣型研修という形で和歌山大学大学院観光学研究科へ派遣された。熊野古道を修士論文のテーマとしていたこともあり、夏季休暇を利用してかねてよ

り興味のあったサンティアゴ巡礼を行うことを決めた。筆者が歩いたのは、最も主要なルートである「フランス人の道」のうち、壮麗なステンドグラスを有するゴシック建築の大聖堂があるレオンから、サンティアゴ・デ・コンポステーラまでの約 320km である。

関西国際空港発、香港経由で降り立ったマドリッド・バラハス空港から、高速バスでレオンへ至る経路は、乗り継ぎの時間も併せて約 28 時間を要した。そして、巡礼者用の宿、アルベルゲで巡礼手帳を手に入れ、巡礼を始めた。巡礼路沿いに点在するサンティアゴ大聖堂の方向を指す黄色の矢印を追いかけながら、平均して 30km 前後を毎日歩き続け、11 日間かけてサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指した。毎朝 7 時ごろから歩き始め、昼食をはさんで 14 時から 15 時ごろまで歩き、一日の行程を終えて辿り着いた街で、その日のアルベルゲを探し、洗濯・食事を済ませて就寝するというのが大まかな一日の流れであった。道中は巡礼者のための整備がよく行き届いており、宿も食事もうれしく済ませることができた。アルベルゲは基本的に大部屋で、小さなところで 6 人程度、最も大きなところでは 100 人以上が同じ部屋で寝ることもあった。巡礼の合言葉は「Buen Camino!! (よい巡礼を)」であり、巡礼者同士で声を掛け合うことはもちろん、アルベルゲやバルのスタッフ、街の人々から頻繁にこの言葉を掛けられ励まされた。



図 5 サンティアゴ大聖堂の方角を指す矢印

歩き始めて 3 日ほどは、肉体的な疲労を強く感じた。真夏を少し過ぎたばかりのスペインの暑さには力を奪われ、慣れないバックパックを背負った体のあちこちに痛みを覚えた。その後はだんだんと巡礼生活に体が慣れ、景色や雰囲気を楽しむ余裕が生まれてきた。歩みを進めるたびに様々な風景が現れ、葡萄畑の間を縫うように進むこともあれば、乾いた荒野の間を何時間もひたすら歩くこともあった。熊野の森と同じ雰囲気を感ぜさせる森を通ったこともあった。1,300m を超える峠をひたすら登っている最中、前から馬が駆けて来て、慌てて脇へ避けたりもした。

同じくらいのペースで歩く他の巡礼者とは、ほとんど毎日顔を合わせるようになった。国籍も年齢もバラバラで、高校生の青年もいれば、還暦を過ぎた夫婦もいた。お互いの巡礼のきっかけや、母国について話をしながら歩き、スーパーで買い出し

をしてアルベルゲのキッチンで夕食を共にすることもあった。巡礼者それぞれが、さまざまな理由を抱えて巡礼に訪れていた。同年代のドイツ人とベルギー人と仲良くなり 3 日間ほど一緒に歩いたが、2 人とも身長が 2m 近くあり、会話が常に頭上から聞こえた。歩幅の差を埋めるために素早く足を動かす必要があり、悔しい思いをしたことを覚えている。自らの巡礼のきっかけを説明する際には共通巡礼について説明し、熊野古道を歩きに日本を訪れるよう PR もしておいた。

巡礼の最終日、初めてサンティアゴ大聖堂が目に見えるモンテドゴソ（スペイン語で「歓喜の丘」を意味する）からの最後の 5km で巡礼が終わってしまう寂しさが込み上げてきた。11 日間の巡礼に思いを巡らせながら順調に歩き、サンティアゴ大聖堂へたどり着いた。大聖堂の前のアルマス広場では、巡礼者同士で抱き合ってお互いの巡礼達成を称えあった。日が暮れるまで広場に座り込み、余韻に浸る巡礼者も少なからずいた。大聖堂で巡礼者のためのミサに参加した後は、巡礼事務所で巡礼証明書を受け取り、顔見知りの巡礼者から初めて会う巡礼者まで、大勢で集まってスペインビールを飲みに出かけた。

VI. 最後に

本稿では、二つの「道」の世界遺産について概要と共通巡礼の条件を説明するとともに、筆者のサンティアゴ巡礼についてのレポートを行った。巡礼という行為は、信仰の有無にかかわらず、自分という存在について深く考えを巡らせる営みである。サンティアゴの巡礼路、熊野古道のどちらの道も、雄大な自然の中で、ゆっくりと呼吸をしながら、自分のペースで一歩ずつ前へ進む。もちろん肉体的には疲労するが、一方で心は満たされていくことを、身をもって経験した。

サンティアゴ巡礼については、特に大学生に経験してほしいと思う。巡礼を志してからサンティアゴ大聖堂に辿り着くまでの間、荷造り、ルートの確認、毎日の宿探し、洗濯など、身の回りのすべてを自分自身で行う。スペインやヨーロッパの一部の国では、サンティアゴ巡礼の証明書を就職活動において有利に働くという話があるほどに、健康で自立した人間になるために絶好の経験であると言える。また、このような巡礼文化が熊野古道や和歌山県域でも浸透することを切に願う。様々な国からの巡礼者と出会い、交流をしながら、自らの足でひたすらに歩くという行為を通じて、きっと新しい自分に出会えるはずである。自分だけの素晴らしい巡礼に、ぜひ旅立ってほしい。もちろん、スペインと和歌山の両方へ。

Buen Camino!! よい巡礼を。

注

- 1) 正確には、「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる高野山町石道は、熊野古道ではない。
- 2) 正確には、登録上「フランスのサンティアゴ・デ・コンポステーラの

巡礼路（1998 年登録）」と「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路（1993 年登録）」の2件に分かれる。

参考文献

- 藤井幸司（2016）世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産.
五十嵐敬喜・岩槻邦男・西村幸夫・松浦幸一郎編著, 神々が宿る聖地 世界遺産 熊野古道と紀伊山地の霊場. ブックエンド.
- NPO 法人日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会（2013）聖地サンティアゴ巡礼増補改訂版 世界遺産を歩く旅. ダイヤモンド社.
- 高森玲子編著（2016）スペインサンティアゴ巡礼の道 聖地をめざす旅. 実業之日本社.
- 田辺市熊野ツーリズムビューロー（n.d.）<http://www.tb-kumano.jp/>（参照日 2018 年 4 月 1 日）
- ホセ・ラモン・マリニョ・フェロ：川成洋監訳（2012）サンティアゴ巡礼の歴史－伝説と奇蹟. 原書房.